

「正しいよりも、楽しくあれ」国際医療協力を目指すに高邁な志はいらない、  
たった一つの素質、それは「楽しそうだな」と思える気持ち

かわち のぶゆき  
**河内 宣之**

国際医療協力局  
人材開発部・研修課  
医師



**★略 歴**

- 2014年 筑波大学医学群医学類卒業  
国立病院機構関門医療センター 初期研修医
- 2016年 東京都立駒込病院感染症科 後期研修医
- 2022年 キングスカレッジロンドン国際保健学修士課程卒業  
国立国際医療研究センター国際医療協力局入局

**★現在の主な担当業務**

- ・ JICA課題別研修 「薬剤耐性・医療関連感染」
- ・ コンゴ民主共和国における感染症サーベイランスシステム強化プロジェクト
- ・ 国際保健協カレジデント研修

## 河内さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

正直に話すと、子供の頃から特に強い志をもって医療職になろうと思ったわけではありませんでした。ただ海外にずっと興味を持っていたことから国際的な仕事につきたいという漠然とした思いはあり、世界を飛び回るような仕事してみたいなというのが子供の頃の夢でした。しかし、周囲にそういうロールモデルもなく、将来について真剣に考えるのを避けていた高校時代のある日、WHO（世界保健機関）で働く医師を特集したテレビ番組を見たことがきっかけで、こういう専門性のある国際的な仕事もなかなかカッコいいかもと思ったこともあり、そういった実に単純な動機で医学部に進学することになりました。

あまり深く考えることなく入学してしまった医学生時代に、「強い志のない自分は医療職になる資格なんてないのではないか」と、色々と思い悩み、本や映画に答えを求めた時期がありましたが、今となってはそういう内省的な時期を長く過ごしたことが、医学以外の分野に目を向ける契機となり、今のキャリアの礎になっているような気がします。また、医学部の閉鎖的な環境が苦手だったこともあり、ヨット部生活を終えた医学部5年生の時に、大学を1年休学して世界（主に南米やインド）を旅して回りました。その時に会った人、この目で見た景色、この肌で感じた空気、そういった全ての経験が、巡り巡って今に役立っているような気がします。



南米を歩き回っていた学生バックパッカー時代



ヨット部時代に出場した全日本選手権にて

## 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

卒業後は、まず山口県下関市という場所にある国立病院機構関門医療センターで初期研修を終えました。常に頭と体を動かす救急外来が楽しく、そこで生まれる人間ドラマに色々と考えさせながら、下関の自然を満喫して2年間を過ごしました。（なぜ縁もゆかりもない下関を選んだかというのは、自分の人生七不思議のうちの一つです。）

その後、後期研修に進む上で専門を決めないといけなくなり悩んでいましたが、「自分は一つの臓器を専門にするより、人間という存在に興味があるのかなと考え、感染症という細菌やウイルスという人間とは違った生命体を相手にすれば、人間という存在を客観的にみられるかもしれない」と考えたことをきっかけに、感染症を専門にしようと思い立ちました。今思うと、意味不明なのですが、当時は割と真剣でした(笑)

そういう経緯で、東京都立駒込病院感染症科の扉を叩きました。実はこれが人生1度目の大誤算(笑)で、感染症というのは人体のあらゆる臓器でおこるため、それぞれの臓器のことを人一倍勉強しないとイケなかったため、非常に苦労しました。しかしながら、HIV/AIDSをはじめとした感染症の診療に携わっている間に、一つの感染症が伝播していく背景には、政治や経済、文化・風習などの社会のあり方が密接に繋がっていることを意識するようになりました。





救急救命の現場で奮闘していた時期も



新宿二丁目でフィールドワーク中の感染症科医

そうして、臨床経験を重ねていくうちに、社会全体を俯瞰した立場から物事を捉えたいと思い、イギリス・ロンドンにあるKing's College Londonの国際保健学修士課程（正確にはMSc Global Health & Social Justiceというコース）に進学しました。国際保健の様々な課題や社会の不平等を、政治・外交・経済・法律・社会学・哲学・人類学などの文系的な学問からアプローチするというユニークなコースです。これは面白そうだなという心の内なる声に耳を澄ましすぎて、これが人生2度目の大誤算。例えば、ベンサムの功利主義、カントの義務論などの哲学をはじめとした人文系の学問を勉強する必要に迫られました。日本語でも理解できないような難解な内容を英語で理解できるわけがなく、暗澹たる思いでロンドンのテムズ川沿いをトボトボ歩いたことは、今となっては良い思い出です。



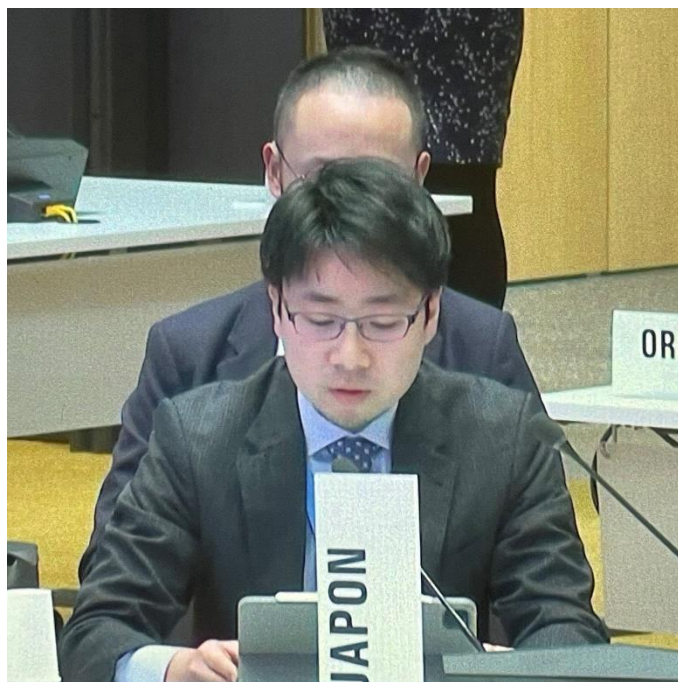
イギリス留学中の多様なクラスメイト達と

ただそういった先人達の哲学の枠組みを学んだ上で、現在起こっている国際保健の問題や、各国が導入する公衆衛生政策や保健システムを分析していくというスタイルは、自分にとって非常に刺激的でした。少し例を挙げると、COVID19のパンデミックにおいて政治や外交の力学がどのように影響しているだろうか、紛争地や難民キャンプにおける人道支援はどうあるべきだろうか、アフリカをはじめとする低中所得国への援助は義務なのだろうか、といった医療や公衆衛生上の問いについて議論を戦わせるという内容です。疫学や統計学といった実用的な学問と比較すれば、一見無意味なことに思えるかもしれませんが、個人的には今後必ず重要になっていく分野だと考えています。

このように、物事について常にクリティカル・シンキング（批判的思考）を行う姿勢を持つことを学び、今までとは全く違った学問分野に触れ、国際保健を医学や医療の側面からだけでなく多角的に捉える視点を得ることができたことは、イギリス留学の大きな収穫でした。また、ちょうど自分がロンドンに滞在していた際にロックダウンが解除となり、色々な人と交流できる大学院生活を送れたことも、学業をサボ・いえ、学業の合間にスコットランドを1年で6度も訪れウイスキーの素晴らしさにも目覚めたことも、幸せなことでした。

### 国際医療協力局に入職するきっかけ、理由はなんだったのですか。

国際保健の世界における上流から下流まで様々なレベルを実際に経験できると思ったことが、国際医療協力局へ入局した一番の理由です。実際に、入局してから半年の間に、WHOにおける国際会議の場に参加させていただいたし、コンゴ民主共和国というアフリカの国での医療の現場を目の当たりにすることもできました。この上流から下流までの流れを俯瞰的にみるというのは世界の実像を明瞭化させるのに非常に重要なことだと考えていて、こういうことが可能な職場は日本でも数少ないのではないかと思います。



入局後にWHOの国際会議に参加した時の様子



コンゴ民主共和国でオオネズミの燻製をゲット



## ——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

あまり具体的ではないかもしれませんが、自分は日本という国が世界で果たす役割ということについてよく考えます。日本という国、あるいは日本人的な考え方というのは世界的にみても非常にユニークだと思います。日本語というのは情緒的で、日本人的な思考を論理的に言語化することはなかなか難しく、また発信もなかなか得意でないことから世界から誤解されることが多いのではないかと思います。しかしながら、気候変動や感染症、紛争・難民など国際保健の問題が国境を越えた健康危機になり、人類がどう生きていけばいいのかという「方向性」あるいは「哲学」がより重要になっていくであろうこれからの時代に、国際的な場でもっとその考え方やプレゼンスを発揮できるのではないかと考えています。日本人としての軸を持ちながら、世界の人々と協調して様々な課題に取り組む、そんな国際保健のプレーヤーになりたいと考えています。

## ——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

「正しいよりも、楽しくあれ」という、国際保健に長く携わっている人が言っていた印象的な言葉があります。『世界をよくするんだという理想に燃えたエネルギーを心に持ち続けることも、社会を変革していく上で確かに重要だが、誰にでもできることではない。さらに「正しさ」を追求しすぎると、それは不条理への「怒り」や「失望」などのネガティブなエネルギーに変わり、行き過ぎた正義は時として人を傷つける暴力にもなりかねない。さらに何が正解かという「正しさ」は、社会によって、国によって、あるいは時代によって変わる。そこで大事なのは、自分がその環境を楽しんでいること、新たな人や世界との出会いにワクワクしていること、その楽しんでいる空気に他人を巻き込んでいけること。それらが、不条理の多い世界で心が折れないために必要であり、またそんな世界を最終的に変えていくこともありうるのだ』という意味だったように記憶しています。

自分がこの場で伝えたいことは、国際医療協力を目指す上で、高邁な志を持たなければ、この世界にくる資格がないということはないということです。「楽しそうだな」という気持ちが少しでもあれば、誰にでも素質があるのではないかと思います。現代社会は何かと「正しさ」が求められがちですが、そういう社会や組織は往々にして息苦しいものです。また、「正しい」というのは世間一般の常識に従うことであり、「楽しい」というのは自分の内なる声に耳を澄ますことでもあります。澄ましすぎると上で述べたように大変な目にも遭いますが、「楽である」とことと「楽しい」とことは違います。

人の一生は、起きている時間で言えば約20000日程度といます。さて意外と短いような気がしてきたら、少しだけ勇気を出して、自分が思う「楽しそうな」世界を覗きにきてみてはいかがでしょうか？



——— ありがとうございました。